

昭和

# SPレコードで迎れば

比島攻略

## SPレコード収集家 ■ 城内 實

(一)

今回は大東亜戦争勃発直後の南方方面三大作戦の一つである比島攻略とその関連のレコードを紹介したいと思う。

本間雅晴中将率いる第十四軍は、昭和十七年一月二日にマニラを攻略した。オープン・シティ（非武装都市）宣言をしたこともあって、ほとんど大規模な戦闘は行われなかつた。

しかしながら、マニラ占領後に米比軍主力がバターン半島方面に退却したことにより、その後第二次に亘る苛烈なバターン攻略戦の火蓋が切つて落とされた。

(二)

十八師団が蘭印作戦のため転戦した結果、第六十五旅団（約七千名、旅団長は奈良晃中将）がその任務にあたつた。

当初敵米比軍の勢力はせいぜい三万程度と実際より過少に見積もられ、また、大部分が山岳と密林で覆われているバターン半島の地形に適した装備が不足していたため、第六十五旅団は密林内の見えざる敵砲兵からの猛射を受け、攻撃開始からわずか二週間で約一千名が死傷した。

ニッチクの「勝利の記録」（昭和十八年三月発売）においてもその模様が伺える。

「バターンに戦う皇軍将士は、三メートル先は全く見ることのできないくらいのジャングルの中で、地の利を知った敵と戦っているのである。しかもバター

第一次バターン攻略戦は、第十四軍の最強部隊であつた第四

ン半島の密林は世界に知られたマレーの密林と勝るとも劣らない、否、それ以上のもので……」

米比軍はこの天然の要塞とも

言えるバターン半島において、戦争が始まるおよそ一年前から

強固な防御線を密林内に構築し、敵を迎撃訓練を重ねていた。しかも、半島尖端の沖に浮かぶコレヒドール島にはさらに堅固な大要塞が築かれていた。

皇軍がこうした厳しい状況を

ようやく認識した頃、既に兵力の三分の二程度が失われていた。

そこで本間軍司令官は、いったん攻撃を中断し、態勢を建て直す決心をした。二月八日、大本

(三)

そして四月三日午前九時、皇軍将兵の総攻撃がついに開始された。敵陣地に対し、陸軍始まつて以来の大集中砲火を浴びせたのである。それにより、一週間後の四月九日に東部地区のキング少将、十一日に西部地区の司令官ジョーンズ少将が相次いで投降し、バターン半島におけ

込み少く、且更に重大なる犠牲を覚悟せざるべからず。最悪の事態に於ては比島作戦全般に重大なる影響を齎す惧なしとせず。

(後略)

かくしてバターン攻略（第一

次）は失敗し、二月中旬に中止された。他方面における攻略作戦が順調に進捗する中、ただバターン半島のみが未攻略のまま残つた。

る組織的抵抗は終焉した。

投降した米比軍将兵は約七万  
名でこれは予想をはるかに上回  
る数であった。日本軍には輸送  
手段がほとんどなかつたため、  
とりあえず半島つけ根のサンフ  
エルナンドまでの六十キロを徒  
歩で護送することになった。そ  
の過程で食糧不足と疲労が重な  
り数多くの米軍及びフィリピン  
人将兵が死亡した。不幸なこと  
にこれがその後「バターン死の  
行進」という表現で呼ばれ、日  
本軍「残虐行為」のかつこうの  
宣伝材料になつてしまつた。

半島尖端から二キロの距離に  
浮かぶコレヒドール島では、ウ  
エーンライト中将以下一万五千  
名の米比軍が皇軍将兵に対する  
最後の抵抗を準備していた。  
(他方、マッカーサー大将、ケ  
ロン・フイリピン大統領、ウイ  
ロビー将軍他主要幕僚は、既に  
(三月十二日)魚雷艇でコレヒ  
ドール島を脱出、ミンダナオ島  
経由でオーストラリアのダーワ

インに退避していた。)

四月二十九日の天長の佳節以  
降、一段と砲撃が強化され、陸  
のみならず空からの猛爆も加わ  
り、ついに五月五日上陸が敢行  
された。

五月七日、米極東軍司令官ウ  
エーンライト中将は、無条件降  
伏を申し出た。そして、同日午  
後十一時五十分マニラ放送局を  
通じて全米比軍に投降命令を發  
するとともに、各地に幕僚を派  
遣してこれを伝達せしめた。な  
お、ウエーンライト中将のこの  
投降命令は「勝利の記録」にも  
録音されている。

いざれにせよ、ここに比島攻  
略はようやく完遂した。

## (五)

戦闘が終わつてしまふとして  
が日本ビクターから発売された  
(昭和十八年八月)。このレコ  
ードは、佐伯孝夫作詩、清水保  
雄作曲で、歌は灰田勝彦、歌上  
艶子である。大変激刺とした明  
るい曲で、灰田の「新雪」(同  
じ曲)で、戦争の悲惨さを歌う  
ところで、不思議なことにハ

年十月発売)と同様に戦時色を  
ほとんど感じさせない曲である。  
今でも巷で愛唱するに値する名  
曲と言える。

一番の歌詞は以下のとおりで  
ある。

いつか見たこの夢 嬉しい夢  
今日は迎えて楽し我らの街よ  
花のマニラの街 青空高く

昭和十八年三月発売)  
比島攻略が予想外に長引いた  
ことや熾烈な戦いであつたため、  
比島攻略の曲を作るとどうして  
も悲壮感溢れる曲となつてしま  
い、それでは売れないでの、レ  
コード各社はあえて比島攻略の  
曲を制作するのを控えたのでは  
ないだろうか。

花のマニラの街  
喜びは胸に充ち  
苦しこ夜は明け行く  
花のマニラの街  
とく走れ小馬車  
深みどり 鐘は鳴る  
新しき朝だ

(続く)

